

わが家では、毎食前、食後の祈りを家族そろってやっている。主人も私も子どもたちも全員当番制で、一日を一人が担当することに、なっている。食卓に並んだ食物に感謝し、祝福を願ひ、この食物が私たちのうちにおられるキリストと同化し、糧となるように。そして、いろいろな願いごともある。そのあとみんなで声を合せて、「デオ・グライアス、お父さん、お母さん（それぞれの子どもたちの名前を

呼びあい）いただきます」というのが、だいたいのパターンになっている。

祈るといっても本当に一、二分の短いものであるけれどふり返ってみると結婚以来、これだけはキチンと続いている。そして、神の前に、一つ

毎日が神の贈り物

藤屋 紀子

の食卓を囲んで、互いに一致したいという願いをもって、毎日を食物と共に神の新しい贈り物として受け入れていたことに気づいた。

「一週間の行事の一つにミサを入れるか、ミサの中に一週間を入れるのか、このどちらかによって、生活はまったく違ってきます」という言葉を聞いたことがある。同じように、一日の中に祈りを加え

るか、祈りを一日にするのかによって、きょうはまったく変わってくるような気がする。それは、私たちが希望している神は確かに昨日よりも、明日よりも、きょうよりも、本当に私たちのそばにいてくださり、今、この場で深く生きていると信じているからである。

私たちがエマオの弟子のように、疲れ、がっかりし、裏切られ、キリストが盗み取られたように感じ、重くトボトボした足どりの時、キリストは本当にどこにおられるのか。きっと、ある食卓で祈り祝福し、パンをさく時におられるのではないのか。